

速報!

南果歩
根岸季衣
久保耐吉
酒向芳
星野園美
森田甘路
長本批呂士
朴勝哲
石橋徹郎
森下能幸
青山達三
松重豊



南果歩



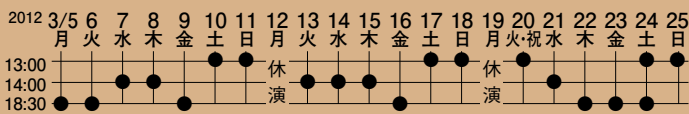
松重豊

2012年3月上演決定!

3/5 (月) 初日 ~ 25 (日)

前売開始 12/17 (土)

チケット(税込) A席 5,250円 / B席 3,150円



お問合せ / ボックスオフィス

Tel. 03-5352-9999

パルマ屋スミレ

陰の現代史に光をあてた

あの『焼肉ドラゴン』に続く鄭義信渾身の書き下ろし!
—一九六〇年代の九州の炭鉱町を舞台に



NEW NATIONAL THEATRE TOKYO

新国立劇場

小劇場 THE PIT
<http://www.nntt.jac.go.jp/play>

パーマ屋スマイレ告知板

九州の炭鉱町を舞台に 鄭義信が描く、陰の現代史とは？

最盛期には全国で八〇〇以上の炭鉱が開かれていたが、その炭鉱労働者のなかには多くの朝鮮人労働者がいた。一九一〇（明治四三年）の日韓併合以後、募集という名で徴用や多くの朝鮮人たちが日本の土を踏んで以来、一九四五（昭和二〇）年三月には九州・山口各県炭鉱の朝鮮人労働者は七万九千七百二人（全労働者の二十七％）にも及んだ。隆盛を誇った炭鉱も、一九六一（昭和

三十六）年をピークに徐々に衰退、二〇〇二年以降は北海道の釧路炭鉱のみが採炭を続けている。その間、大小の炭鉱災害が発生したり、労働条件に対して訴訟も起こされた。また、事故後、助かった鉱員に一酸化炭素中毒の後遺症が襲い、会社側と三十年にわたる争いもあった。そうした歴史的な背景をふまえて、『パーマ屋スマイレ』は九州のある炭鉱町を舞台に、物語は展開する。

ものがたり

一九六五年、夏。九州、「アリラン峠」と呼ばれた小さな町があった。そこからは有明海を望むことができた。アリラン峠のはずれにある「高山厚生美容所」には、元美容師の須美とその家族たちが住んでいる。須美の夫の成勲は炭鉱での爆発事故に巻きこまれ、CO患者（酸化炭素中毒患者）となってしまった。須美の妹・春美の夫もまたCO患者となり、須美たちは自分たちの生活を守るために、生きるために必死の戦いを始めた。しかし、石炭産業は衰退の一途をたどり……。



坑員社宅の街にあった 理容所、美容室

炭鉱施設のそばには炭鉱員とその家族が住む坑員社宅があり、集会所や保育所、病院、郵便局、銭湯、購買所、理髪店、美容院、広場などがあって、ひとつの街が形成されていた。銭湯はまさに人が集まる社交場だが、理容室、美容室も散髪やカットをしてもらわない人も集まり、店はいわばサロンのな場所だった。また、時には広場で映画も上映されたりして、社宅外に住む一般地区の人々にとってははうらやましかったようだ。

日韓で再演。

涙と笑いと感動が爆発！

『焼肉ドラゴン』伝説



あの時代、あの町、そして愛すべき人々。万博が開催され、高度経済成長に踊る一九七〇年前後のある在日コリアン家族を描いた『焼肉ドラゴン』。二〇〇八年、新国立劇場

で初演、韓国・ソウルでも上演、いずれもスタンディング・オベーションの熱狂的な反響を巻き起こして、両国で多数の演劇賞を受賞。そして今年、同じく両国で再演。愛すべき、ちょっと迷惑な人々が巻き起こす舞台は、初演以上の涙と笑いと感動をもたらした。作者の鄭義信が一貫して描き続けた自身の原風景、在日コリアンとして生まれ育った共同体での経験を見事に劇化、家族の小さな物語が大きな歴史の物語と成り、高い評価を得た。『パーマ屋スマイレ』はその前史ともいえるべき、一九六〇年中頃に時をさかのぼって鄭義信が再び在日コリアンの物語を紡ぐ。



鄭義信が語る

『パーマ屋スマイレ』

『焼肉ドラゴン』の取材の時、伊丹空港のそばに住んでいた在日韓国人の方からこんな話を聞いた。「万博のための、伊丹空港の新滑走路建設にですね、九州の炭鉱から、閉山になってあぶれた労働者たちが流れてきたんですわ…そうです、そうです、こっちにおける親戚やら、友人、頼って、韓国人やら…日本人もようけ来ました。…とにかく、どっと押し寄せてきて、急に、賑やかになってね…」僕は何気ないその言葉に衝撃を受けた。九州の炭鉱と、関西の空港が結びつくことなど想像もつかなかった。教科書に載っていない歴史の一端を突きつけられた気がした。

（名もない韓国人、日本人労働者たちが、繁栄の陰に常に、常に、存在してたんや…常に、常に、日本の歴史の底辺を支え続けてきたんや…）『パーマ屋スマイレ』の舞台は炭鉱の隅にあるちいさな理容所である。そして、そこで暮らすささやかな家族の物語である。しかし、そのささやかな物語の中で、かつて日本経済の大きな柱であった炭鉱を描きたいと考えている。そして、60年代から70年代、高度成長時の日本の姿を、あの高度成長とはなんであったのかを、それが今の僕たちになにをもたらしたのか…それらもろもろを、ちいさな理容所につめこむことができれば…と願っている。



新国立劇場

小劇場 THE PIT
<http://www.nntt.jac.go.jp/play>

ボックスオフィス

Tel.03-5352-9999